

開城後の桑名藩

西 羽 晃

慶応4（1868）年1月23日、桑名藩主の嫡子・松平万之助は四日市の新政府軍陣営に出頭して降伏した。そして四日市川原町（現京町）の法泉寺に幽閉された。寺は亀山藩士が警護にあたり、檀家の出入りも監視されるので、お参りに来る人も少なくなり、寺では非常に困っている。



現在の法泉寺（建物は当時とは違う）

桑名でも藩士は寺々に分かれて収容されており、出入りには鑑札が必要であった。個々人の私用は、まとめて用を果たした。

28日に桑名城を開城したが、新政府軍は亀山藩・彦根藩など数知れずが桑名に滞在した。桑名の町全体に軍隊が溢れ、大混雑した。うち亀山藩藩士百人ほどが仏眼院に入り、門外にも野宿した。春日神社境内では彦根藩士のために大きな「はそり」を14,5ほどを備えて炊き出しをした。

孝明天皇の皇女である和宮は徳川家茂に嫁いでいたが、徳川家に対して穏便な処置を新政府に嘆願するため、まずはお付きの女官である土御門藤子を江戸から京都へ派遣した。藤子は上京の途中に2月1日に桑名の光徳寺で新政府軍の総督である橋本実梁と面会した。その夜に藤子は顕本寺に泊まっ

て、翌日に京都へ向かった。

橋本らの新政府軍は2月14日に桑名を出て、江戸へ向かった。同月20日には新政府軍の大総督である有栖川宮熾仁親王が桑名で泊り、翌日は佐屋を経由して名古屋に泊っている。

新政府は誕生したばかりなので、桑名藩の統治も手探りの状態だったと思われる。今までは桑名藩独自で政治を行っていたのに、占領下のため何ごとも尾張藩を通じるので、万事がもどかしい状態であった。

4月になると占領政策も徐々に緩和された。藩士家族は自宅を離れて縁故先に移っていたが、4月2日の通達で自宅へ帰ることが許可された。但し外出は控えるように言われた。翌月の閏4月13日には幹部の藩士を除いて一般の藩士も収容されていた寺院から自宅謹慎となって帰宅した。同じ閏4月22日には幹部の藩士も自宅謹慎を許可された。同月29日は四日市・法泉寺に幽閉されていた松平万之助も桑名の本統寺に移ってきた。万之助も藩士も何時までも収容していると警護の人数・費用もかかるために解放したのである。